



やなぎっ子

命てんでんこ

校長 萩原 哲哉

大型台風がほぼ週末ごとに接近・上陸し、記録的な降水量により、甚大な被害を受ける秋となっています。ここ埼玉県でも被害に遭われたり、亡くなられたり方がいらっしゃいます。謹んでお見舞い・お悔やみを申し上げます。悲しく痛ましいことですが、科学や文化がこれほどまでに発展した今日でも、まだ自然の脅威の前では、どうにもならないことが起きてしまうことを、改めて実感いたします。

東日本震災時に大きな被害を受けた三陸・釜石市には、「津波てんでんこ」「命てんでんこ」という言葉があります。「てんでん」とは、「各自・めいめい」という意味の方言で、「津波（への対応）はめいめいで」「命（を守る）は各自で」という意味になります。この言葉で防災教育を実施した釜石市内の小中学校では、震災の折、全児童・生徒計約3千人が即座に避難し、生存率99・8%という成果を挙げ、当時、「釜石の奇跡」と呼ばれ、マスコミでも繰り返し取り上げられました。

「人のことにかまわないで逃げろ」という教えは、津波被害の恐ろしさを十分に理解していない身には、即座には理解・賛同しがたい文言ですが、「人のことは放っておけ」ではなく、離れ離れになった家族を探したり、とっさの判断に迷ったりして、「逃げ遅れるのを防ぐ」ことが、言葉の真義であることを確認したいと思います。集落が全滅することを防ぎ一人でも多くの命を救うために、海に面した土地で暮らす方々は、そうやって命をつなぎ、地域の文化を継承してこられたのです。

本市の防災教育は、災害時に「自助」・「共助」が主体的にできる市の子どもの育成を目指しています。このうち小学生（高学年）が行う「自助」には、「自分の判断で状況に応じた行動をとり、自分の身を守ること」「危険を予測し、自分の身を守ること」とあります。また、「共助」には、「危険な状態を発見した場合には、近くの人に連絡できるようにすること」や、高学年では「家族や身近な人々の安全にも気配りができるようにする。」「緊急時の通報や、簡単な応急手当ができるようにする。」ことが示されています。

学校では「火災」「地震」「竜巻」などの天災時に身を守る方法・手段を、避難訓練として実施しています。また登下校時には、交通指導員さんをはじめ、ボランティアの方々や保護者の方々の見守りをいただいています。

片柳（小）の「命てんでんこ」が何になるのかは、一概には申せませんが、災害時だけでなく、日々生きていく中で、授かった命を自分の力で守ることが、根幹に来ることは確かなことであると思います。

「たぶん（大丈夫）」から、「もしかしたら（災害が起きるかも知れない）」へ。さまざまな備えを十分に重ね、災害に負けない心構えを培っていきたいと思います。